

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティ

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中!

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」 授業が変われば
学びが変わる!
子どもが変わる!

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

スマホから、ご視聴いただけます

「授業で勝負する」ためのヒントは、
子どもたちとの何気ないやりとりの中にある——
気づきを実践につなげられるお話です。ぜひ、ご覧ください!

動画の
ご視聴は
こちらから



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で
是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

これまで多くの場面で決断に迷う経験をしてきました。そのたびに私が判断基準にしてきたことは、「どの選択肢に決めることが一番後悔しないか」ということでした。対応や行動の選択が困難な場面になると、どうしても視野が狭くなり、出口の見つからない堂々巡りで頭の中がいっぱいになってしまいます。そんな時は、まず、現在起こっている事実だけを冷静に見ること、第三者の意見をお聞きすることが突破口になりました。そして、浮かんだ対応策の中で「一番後悔しないのはどれか」を自分の心に聞いて決断し、後は、誠意をもって粘り強く行動して乗り越えてきたと感じます。様々な人との繋がりをたくさん持っていることが、困難を乗り越える力になり、人生を豊かにする源になると感じています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央

Instagram QR code

FOLLOW US!

Facebook QR code



2024 夏号 (年4回発行) No.18
2024年7月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665 <https://nikke-edu.org/>

特集

未来につなぐ学校づくり 第3回

官民のコラボレーションによる 「学校内適応指導教室」

私がつくる子どもの笑顔 第14回

子どもたちの 笑顔があふれる学校づくり

連載コラム 第3回

レジリエンスの構築に向けて — 今、求められる「乗り越える力」—

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は沖縄の珊瑚の海と夏空です



子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくこととなります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第3回は、大阪市立堀江中学校の横田勝一郎校長です。

第3回 官民のコラボレーションによる「学校内適応指導教室」

よこた かついちろう 横田 勝一郎 校長
《大阪市立堀江中学校》

本校は1959年、同じ大阪市西区の花乃井中学校から分離独立し、今年で創立66年目を迎えました。西区は人口急増地域で、生徒増に対応するため2022年8月、現在の校舎（大阪市立西高等学校の跡地）に移転しました。今年度の入学者数は324名で、全校生徒数は875名という大規模校です。

校区は難波や心斎橋といった繁華街に近く、洒落たカフェや用品店も立ち並び、他地区から子育て世代が多く流入してきている人気の地域です。生徒数が多いだけあって、行事や部活動がとても盛んな活気ある学校です。ここでは、安心・安全な学校の創造を目指し、官民一体となって進めている取組を紹介します。



学校教育目標

- 社会の中で生きて働く知識・技能の習得
- 思考力・判断力・表現力の育成
- 人間性（感謝・謙虚・寛容）の涵養

めざす生徒像

- 世のため人のために行動できる生徒
- 美しい生き方を志向する生徒



教育課題の洗い出し

私は、2023年4月に着任しました。着任後、全教職員と個別面談を行う中で、さまざまな学校課題があがってきました。学力課題（学力の二局化）、生徒指導課題（いじめ・不登校）、保護者対応（苦情対応）など、課題は山積していると感じました。とりわけ、その中で気がかかったのが不登校でした。2022年度の不登校生徒の割合は全校生徒の

9.21%、実数では71名にも達していたのです。また、不登校生徒の多くに、「学校生活に対する不安」「学校生活に対してやる気が出ない」「生活リズムが不調である」「発達の多様性がある」といった事実があることも分かりました。これらのことから、本校においては、不登校対策は喫緊の課題であると認識しました。

どうする不登校対策

これまで校長として勤務した学校は、現任校を含めて3校です。それぞれの学校の課題は違いますが、不登校に関しては共通課題です。最初の学校と、その次の学校でも不登校対策に取り組んでいました。具体的には、**外部人材を活用した学校内適応指導教室**（以下、適応指導教室）を設置するという手法でした。その際、外部人材は誰でも良いというわけにはいきません。学校に入ってくださいから、「守秘義務を果たしていただける人物」「適切な子ども支援のできる人材」でなければなりません。そのため、これまでの2校では、地域保護司会から保護司を派遣していただく形態をとりました。本校においても地域保護司会からの支援

を受けようと思っていたのですが、適応指導教室の設置について区長（三村浩也 西区長）に相談したところ、思わぬ展開となりました。

校長 「登校できない、登校しても教室に入れない子どもがたくさんいます。そんな子どもたちが安心して学校生活を送れる居場所、適応指導教室を設置しようと思っています」

区長 「とても良いことですね。区役所としても、支援できることを考えてみたいと思います」

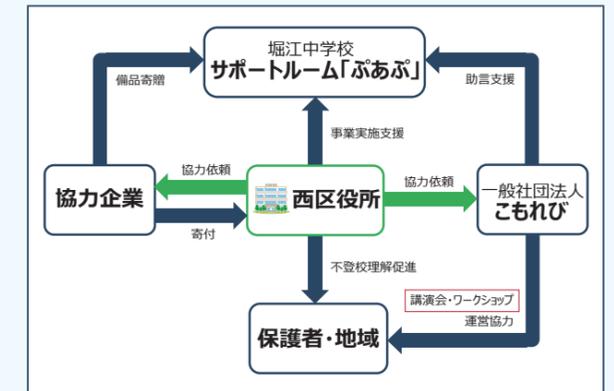
学校・区役所・民間団体・企業のコラボレーション

区長が学校に訪れた時、前述のようなやりとりがありました。その後、区役所の教育担当から連絡があり、不登校の現状、校長が対策として考えていることなどを聞き取りに来ていただきました。そして、具体的な対策を詰めていくことになりました。

まず、適応指導教室をサポートしてくれる人材について協議した結果、「一般社団法人 こもれび」（大阪市西区）とマッチングをしていただきました。こもれびは、障がい児や障がい者を対象とした相談支援をはじめ、児童発達支援や放課後等デイサービスの運営、不登校の子どもたちを対象にした活動を行っている民間団体です。本校の不登校支援には、公認心理師や社会福祉士など、心理や福祉のプロが入ってくることになり、人材についての目処がつかしました。次は、スタッフに支払う人件費や、適応指導教室で使用する備品（液晶プロジェクター、電子ホワイトボード、本棚など）をどうするかです。これらについては、区長とつながりのある区内複数の企業から支援していただけることになりました。このような、学校・区役所・民間団体・企業のコラボレーションは、他に例を見ないものです。

現在、本校では、不登校生の保護者を孤立させないための取組、子育てや不登校について広く啓発するための取組として、講演会やワークショップを開催しています。（西区役所主催、「一般社団法人 こもれび」運営協力）

官民コラボの不登校支援事業実施イメージ



サポートルーム「ぷあぷ」運用の実際

本校の適応指導教室は、サポートルーム「ぷあぷ」という名称です。「ぷあぷ」はフランス語（peu à peu）で、「一歩ずつ、少しずつ」という意味です。毎週、火曜日と木曜日の10時から15時まで開設しています。この時間帯、利用したい生徒は、自分のペースにあった時間に登下校することができます。もし早めに登校した場合でも、利用できるようにしています。昼食については、給食を教室から運んでもらうこともできます。



ここでの取組は主に2つです。1つは「学習支援」です。これは自学自習を基本とし、**生徒のニーズに応じてオンライン学習も可能**です。教室からの授業配信も含まれます。もう1つは「自立活動」です。様々な**体験活動を通してソーシャルスキルを向上**させるものです。例えば、仲間づくりゲームなどが行われます。これらの取組によって、サポートルームを利用する生徒の基礎学力を定着させるとともに、コミュニケーション能力など対人関係を良好にする力を高めています。そして最終的には、自分の教室に戻ることを目指しています。



おわりに

不登校問題の解決の目標は、生徒の将来的な社会的自立です。また、進路の保障も非常に重要です。さらに、生徒だけでなく、保護者へのサポートも忘れてはなりません。本校では、これらの視点を軸に不登校対策を実施しています。しかし、昨今の教員の業務は「ビルド」の連続で、「スクラップ」

できません。そのような状況下で充実した不登校対策を進めるためには、学校外からの支援が非常に有効です。今後も、区役所や企業、民間団体と協力し、より効果的な不登校対策のあり方を追求していきます。

※「ビルド」：新たな取組の構築 / 「スクラップ」：不要になった取組の廃棄。

私がこくろ 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第14回は、大阪市立八幡屋小学校の井原高志校長です。

第14回 子どもたちの 笑顔があふれる学校づくり

《大阪市立八幡屋小学校》 井原 高志 校長

本校（大阪市港区）は、全校児童数172名、全学年単学級の小さな学校です。児童数が少ないため、学年の枠を超えて子どもたちのことがよく見えます。先生どうしの関わりも多く、みんなで子どもたちを見守りながら、一人ひとりを大切に教育活動を行っています。



学校教育目標 知・徳・体の調和のとれた、人間性豊かな実践力のある子どもを育てる

めざす子ども像 しの強い子 …… 自分の考えをしっかりと持ち、心豊かに自分らしく生きていける子

子どもとのつながり

朝は正門から

毎朝、登校の時間になると正門に多くの先生が立ちます。当番の人もいれば、それ以外の人もあります。先生方が登校してくる子どもたちに一緒に声をかけると、元気いっぱいあいさつが返ってきます。その時、元気がない子がいれば励ましの言葉をかけます。心が沈んでいる子には、話しかけてみます。毎朝、子どもたちは校舎に入る前から、先生との交流が始まります。



やさしさを育てる

子どもたちは、地区ごとに異なる学年で構成された班で集団登校し、高学年が低学年を気遣いながら一緒に学校に向かいます。その際、地域の見守り隊の皆さんが、集合場所から学校まで付き添ってくださいます。そのおかげで子どもたちは安心して、楽しく会話をしながら登校してきます。また、毎週木曜日の児童集会や、自分たちが考えた遊びを楽しむ「キッズタイム」では、「ヤハタヤキッズチーム」という名の縦割り班で活動します。ここでも、低学年のことを気遣う高学年の姿が見られます。

人にやさしくした子、人のために頑張った子には、教職員から「グッジョブ！カード」が贈られます。子どもたちはそのカード

教職員の連携

授業が始まって校内を回ると、教室では先生の冗談に子どもたちの笑いが響いています。休み時間には、先生と話す子や、元気に遊んでいる子の様子が見て取れます。子どもとの関わり、子どもとのつながりを大切にする教職員の存在が、本校の自慢です。また、先生どうしの関わりが多く、職員室や廊下でよくコミュニケーションをとっています。本校では、1つの学級に学級担任、特別支援学級担当、教科担当、サポーターなど、多くの教職員が連携して関わっています。そのため、気になる子どもの様子を共有するとともに、接し方についてよく相談しています。

複数の教職員が一人ひとりの子どもに関われることが、本校の強みです。

を机の中で貯めていき、10枚になると全校児童の前で紹介されます。みんなから拍手で称えられた子どもは、はにかみながら誇らしげな顔をしています。この活動を通して子どもたちの自己有用感が高まり、やさしい心が育ちます。そして教職員には、子どもたちの良いところを見つけた視点が増えていきます。



やさしさを育てる「グッジョブ！カード」

学ぶ気持ちを育てる

学力向上をめざして、2年前から算数科の研究を推進しています。学級担任と教科担当が連携し、少人数指導（習熟度別を含む）を行うなど授業形態を工夫して進めています。また、勉強の苦手な子が自分らしく学習できる環境をつくりたいとの思いから、放課後学習に取り組んでいます。参加者は各学年から5名までとし、子ども・保護者・先生が相談して決定します。学習計画に沿いながら、学びのコラボレーターと学力向上担当の先生が中心となり、サポーターも含めて進めています。ここでは、普通の教室では見られない笑顔を目にすることができます。

さらに、研究部長の提案で、全校児童が「算数アタック」に楽しみながら挑戦しています。これは、文章問題を正しく読み取る力を高めるためのもので、毎週1回、玄関に問題用紙が設置されます。すべてが文章問題で、そこには解答に不必要な文章や数字も意図的に記されています。全校同一の問題には難易度が「星」で示されていて、1年生でも頑張れば解ける問題もあります。子どもたちは、文章で表現されている場面や状況をイメージしながら解答し、個々にB O Xに提出します。正解者は木曜日の給食時の放送で紹介されます。

名前を呼ばれる達成感があり、高学年では正解者の人数を競うようになるなど、子どもたちが自ら学ぶきっかけにもなっています。



9/8（金）の問題 () 名前 ()

きよしさんは、ポテトチップスが欲しくて商店街のお菓子屋さんを3軒まわり、探していたコンソメ味をやっと見つけて、6袋買いました。家に帰ると、妹が欲しそうにしていたので半分に分けてあげました。ところが、お母さんが「お兄ちゃんのおこづかいで買ったのだから、少しくらい遠慮しなさい。」と注意したので、妹は1袋返しました。きよしさんは何袋食べることができましたか。

式

しめきり9/13(水)

答え

スポーツを楽しむ気持ちを育てる

毎週月曜日と金曜日の放課後に、子どもたちはバスケットボールに取り組んでいます。参加対象は1年生から6年生までの全学年で、技術面より楽しむことを目的としています。現在、バスケットボール好きの51名が集まっています。また、毎週火曜日の放課後には、20名の子どもたちがバドミントンを楽しんでいます。指導者は、いずれも本校の先生です。

これらのスポーツ活動を通じて、「うまくなりたい」と思って自分でがんばる子どもが育ち、上級生への憧れが生まれ、良い縦のつながりが形成されます。毎週3日間は放課後もにぎやかです。楽しみながら心も体も鍛えます。



人・自然とのつながりを大切にする

本校には田植えのできる小さな水田があり、5年生の児童が「米作り」に取り組んでいます。毎年6月、住吉大社（大阪市住吉区）の御田植神事が終わった後、稲を分けていただきます。秋には立派に実った稲から米を収穫し、家庭科の調理実習でいただきます。

また、はぐくみネット、公園事務所、P T Aの皆さまの協力を受けながら、3年生の児童が「植栽活動」に取り組んでいます。公園事務所の方の丁寧な指導のもと、一人が二鉢

おわりに

先日の学校協議会で聞いたお話です。「朝、交差点で見守り活動をしていると、それぞれ信号を待つ子がいました。『どうしたの？』と声をかけると、その子は『早く学校行きたいねん。だって学校すきやもん』と言い、青になったとたん走って学校に向かいました。校長先生、八幡屋小学校いいですね」

つります。春はヘゴニアセンバ（赤・白）、秋はビオラ（黄・青）を植えます。学校・家庭・地域と行政の皆さまが一体となって活動を支援していただき、本校の壁面は花いっぱいの「あいさつ通り」になります。

さらに、子どもたちがよく遊んでいる地域の公園を縦割り班で掃除します。その際、普段は気がつかないゴミの多さに驚かされ、もっときれいに使おうという気持ちが芽生えています。

とっていただけました。ありがたいお話です。

八幡屋小学校は、今年10月に「創立100周年」を迎えます。これからも、子どもたちの笑顔があふれる学校づくりのために、新たな挑戦を始めていきます。教職員みんなで楽しみながら。

レジリエンスの構築に向けて

— 今、求められる「乗り越える力」 —



《ニッケ教育研究所顧問》 かつもと たかお 勝本 孝夫
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

「現実課題をいかに克服するか」を考え、行動に移す時、試練や困難に立ち向かっていく必要があります。変化が激しく先行き不透明な時代にあって、「レジリエンス（困難を乗り越える力）」の発揮が求められるのは、そのためではないでしょうか。ここでは教育現場で得た知見をもとに、レジリエンスを生み出す要因について考えていきます。今回は③をお話しします。



「乗り越える力」を生み出す4つの要因

- ① 希望を抱き続ける「心の芯」
- ② 試練・困難に意味を見出す「発想の転換」
- ③ 多様な人とつながる「しなやかさ」
- ④ 自分自身を俯瞰する「客観的な視点」

3 多様な人とつながる「しなやかさ」

「乗り越える力」を生み出すためには、4つの要因を具体的なイメージとして思い描くことが大切です。前回の2024春号では、希望を抱き続ける「心の芯」を土台に、試練・困難が自分を成長させるという「発想の転換」が必要であるとお話ししました。出口が見えないような逆境の最中にあって、立ち向かう、心のエネルギーを出し続けることができるからです。さて、ここまでは、自分ひとりで乗り越えられると思える状況でのことです。しかし、遭遇したことのない、大きな壁が目の前に立ちだかたならばどうでしょうか。逆境や苦悩の波に押し流されてしまうかも知れません。このような時、私は教員としての実体験から、多様な人とつながる「しなやかさ」が心のエネルギーを強くすると考えています。



予期せぬ試練・困難

日々の教育現場では、実にさまざまな「予期せぬ試練・困難」に直面します。子どもや保護者、地域、教職員やその家族に関わる問題、災害や感染症といった社会や自然環境の変化に起因する問題などです。そして、これらの試練・困難は、何の前ぶれもなく訪れます。過去に経験した問題であれば、

その知識を活かして適切に対応できるでしょう。ネガティブな感情よりもポジティブな感情が優り、乗り越えられるのです。しかし、経験したことのない大きく複雑な問題に直面した場合、乗り越えていくためにはどうしたら良いのでしょうか。

スマホで読める、感動のコラム!



レジリエンス

親鳥に見守られながら、早くも子ツバメが巣立ち始めました。まだまだおぼつかない羽ばたきのため、時折吹く風に煽られ…

続きはこちらから



本物の授業

いよいよ教育現場は1学期末を迎え、日々とてもご多忙のことと思います。この時期になると、保護者懇談会での忘れ…

続きはこちらから



山よりでっかい獅子は出ぬ

それは、私が小学校教頭時代に経験した、忘れられない一コマです。

その日も業務に追われて遅くまで学校に残っていると、一本の電話がかかってきました。それは、学校に対する苦情の電話でした。おおよその対処の仕方は心得ていたのですが、落ち着いて相手の話を聞くことにしました。しかし、話を聞いているうちに、私も経験したことのない非常に深刻な内容であることがわかってきました。電話が終わり、誰もいない夜遅くの職員室で私は茫然としていました。心に“ずっしり”と重たいものがのしかかり、底の見えない真つ暗な穴に沈んでいくような心境になっていたのです。この時、今まで経験したことのない逆境に直面したのです。とても業務を再開する気にはなれず、私は職員室を後にしました。

帰りの道のりで、「どう対処すべきか」「これで私の教員人生も終わりか」という思いが、頭の中をぐるぐると駆け巡っていました。やがて駅近くまで来た時、偶然にも、あるPTA役員の方とばったり出会いました。

「これは教頭先生、遅くまで本当にご苦労様ですね。それにしても、なんだか元気がないですよ」

「こんばんは。いろいろとあって、少し落ち込んでいます」

「教頭先生、この辺の店で、ちょっと話をしませんか？」

私は駅前のお店で一緒にさせていただくことにしました。

「なあ、教頭先生。何があったか無理に聞こうとは思わんけど、教頭先生が倒れたらアカンで。できることがあれば応援しますよ。『山よりでっかい獅子は出ぬ』(※)と言いますやろ。大丈夫です。腹を決めたら、どうにかなるもんです」

「自己効力感」を高める、多様な人とのつながり

それ以後、仕事や立場、年齢、性別などの違いを超え、多様な人と積極的に言葉を交わす「心の交流」を大切にしました。保護者、地域の方をはじめ、教職員や学校に出入りしている業者の方、企業や行政の方。さらには、学生時代の恩師や私の家の近隣の方などの何気ない会話から、新たな

本当の強さは「しなやかさ」

大きな試練・困難に直面した時、まわりの人の言葉に耳を傾け、知恵を借りることも必要なのではないでしょうか。その際、気の合う仲間だけでなく、多様な人とつながる「しなやかさ」を持つことが大切です。なぜなら、多様な人の経験知を学ぶ中に“新たな可能性”が生まれてくるからです。多様な人とつながる「しなやかさ」とは、自分の弱さや強さを知り、多様な人の支えを得て心のキャパシティを大きくすることと言えます。粘り強く乗り越える柔軟性を身につけることで、試練・困難を乗り越えるための心のエネルギーをより強くするのです。レジリエンスの構築に向けては、未経験の試練や困難を如何に乗り越えていくかということが重要なのです。

そう言う、逃げ出したいような逆境におかれても、どうにか乗り越えてきた数々の経験を率直に話してくださいました。企業に勤めてこられた方の経験ではありませんが、教育一筋で歩んできた私にとって、とても新鮮で異なった視点からのアドバイスとなったのです。

——— この方は、試練・困難から逃げず、真正面から現実を直視し、感情的にならずに合理的に捉えている。そして、同業者だけでなく、さまざまな分野の方々から数々のアドバイスを受けている。生き方に“しなやかさ”がある。だから、多くの逆境を乗り越えることができたのだ。『山よりでっかい獅子は出ぬ』という譬えは、単なる精神論ではなく、この方の生き方から紡ぎ出されたものだ。地に足のついた“生きた言葉”だ ———

小一時間ほどの会話でしたが、別れ際、私の心には晴れやかな太陽が昇ってきました。そして、苦しい時には、周りの人々の助けを借りる“しなやかさ”も必要であるとの思いに至ったのです。

私はこの方に感謝すると同時に、心に誓いました。「学校の児童や保護者、そして地域の方に恩返しをしなければならない」と。そう思うとなぜか勇気が出てきて、前へ、前へと進む心のエネルギーがふつふつと湧き上がってくるのを覚えたのです。“人は人の中でこそ成長する”は私の一貫した人生観ですが、レジリエンス構築のためには“多様な人とのつながり”がとても重要だと痛感したのです。

※ 山よりでっかい獅子は出ぬ：複数の解釈がありますが、ここでは、「自分が乗り越えられないような試練はない」という意味です。目の前の厳しい状況から逃げずに、乗り越えていくことが、自身の成長につながります。

「気づき」が生まれてきました。不思議なことにそれまで気にも留めなかった言葉から、スポンジが水を吸い込むが如く、自分の生き方につながる多くのことを学ぶことができました。まさに、「自己効力感」を高める数々のヒントを得たのです。

初夏から盛夏にかけて、竹はぐんぐんと伸びていきます。そして、どんなに強い風が吹いても決して倒れない立派な竹に成長します。そんな竹を見ていると、倒れないのは、太くてたくましい竹に“しなやかさ”や“柔軟性”があるからだとの思いになります。本当の強さとは、目の前の試練・困難の壁を“ぶち破る”のではなく、“粘り強くしなやかに乗り越える”ことではないでしょうか。

